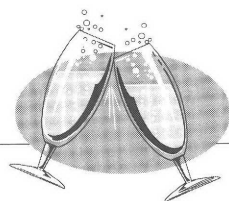


## チリーパタゴニア北紀行 ピスコサワーで乾杯

京都大学大学院 医学研究科疫学研究情報管理学講座

坂本 純一



9月の末、北半球の日本では既に3月末の桜の季節にあたるにもかかわらず、プエルト・モンの空港には氷雨が降っていた。霏混じりの雨は、南米という言葉から連想される暖かさや明るさのイメージを吹き消さんばかりに、風景を灰色の澱の中に沈めようとしているようにも見えた。

着いた町の名はプエルト・モン (Puerto Montt) と言う。思えば長い旅であった。成田からダラスまで12時間、そこで6時間の待ち時間の後、飛行機に乗りかえてさらに10時間近くかかって、やっと首都サンチアゴ (San Tiago) に着いたと思ったら、すぐ次の日、さらに1,000km以上も南に下ったプエルト・モンに飛び、そこからまた南に向かって進むとのことである。

そもそも何故このような地球の反対側まで来てしまったかと言うと、チリ第二の都市であるコンセプション (Concepcion) で日本とチリの修交100周年記念癌シンポジウムが開催されることになり、それに招待されてしまったためである。メンバーは、南米各国との間の民間親善大使とも讃えられている名古屋城西病院長の小塚正雄先生を団長とし、三重大学の矢谷隆一先生、新潟大学の渡辺英伸先生、愛知県がんセンターの田島利男先生などの一行で、翌々日から3日間ぶっ通しで開かれるシンポジウムに参加し、各自約1時間の講演を2つか3つ、またチリの癌専門医とのシンポジウム形式のディスカッションを4、5回、行うことになっていた。学会開催より2日ほど早くチリに到着した我々のために、コンセプションの大学側がチリの南の端パタゴニアの入り口にある、ここ

プエルト・モンへ案内して来てくれたわけである。

親切はありがたかったが、とにかく信じられないほど寒いことに閉口した。ミニバンに乗せられると1時間ぐらいかけてバルグア (Pargua) という港町に着き、そこから車が数台ぐらしか乗せられない小さなフェリーボートに乗り移った。海は荒れていて、風は氷のようであった。コートを着ていても震えている私を尻目に、スーツだけの矢谷先生は涼しい顔でニコニコされていた。

フェリーは40分くらいでキロエ島という島のチャカオ (Chacao) に着いた。キロエ島はジャガイモの原産地であると言われているが、海があるだけの荒涼とした場所であり、地味も痩せていてとても作物のとれるような場所とは思えない。このような過酷な気候でも育つジャガイモが、やがてやはり高地のせいで他の作物の取れないインカ帝国の主食の一つとなり、そこからドイツやアイルランドなどに広がっていったと言われている。海沿いに進んで、カウリン (Caulin) という村でとあるレストランに入り、牡蠣をご馳走になった。食事の前には必ずと言っていいほどアペリティフが出る。ピスコというペルー産の蒸留酒にレモンとソーダを入れたピスコサワーというカクテルである。これで乾杯した後、牡蠣を食べ、チリ特産の白ワインを飲む。獲れたての牡蠣は、日本と同じような味のものから、経験したことのない奇妙な風味のものまであったが、とにかく新鮮であること、同時に服用したアルコールによって充分消毒されるのではないかと判断から、中毒の危険はないと考えることにした。さらに、カウリンか



オソルノ山（チリ富士）とジャンキウエ湖を背景に（左端が筆者）

ら西に進んでキロエ島北部の中心地アンクー（Ancud）に向かう。アンクーでもまたレストランで食事、ピスコサワーで乾杯し、名産の鮑と雲丹でまたまたチリワインを飲んだ。鮑は、日本のものに比べるとほんの少し軟らか目ではあるが、味は変わらない。1個約100円である。私に同行して案内してくれたコンセプション大学の教授であるDr.フランシスコ・ムシエンテスに、香港の福臨門でこれぐらいの鮑を干して戻したものを注文すると1個300ドルだという話をする。Dr.ムシエンテスは、もう教授はやめてここで仕入れた鮑を干して香港へ売りに行くと真顔で言って笑わせてくれた。雲丹は、丼に使うぐらいの大きなお椀に山盛り一杯で約400円である。味はといえば、日本のものと同じように軟らかくて海の香のするものから、数の子をほんの少し軟らかくしただけで、生臭くジャリジャリした歯ごたえの不味いものまで一緒にたになって容器の底までびっしりと入っている。これで一人前である。ワインビネガーのようなものに漬けてあったが、味はいまひとつである。ここで醤油とわさびがあれば悪くないのにと思っていたら、団長の小塚先生が持参の醤油を出してきて下さったので結局全部平らげってしまったが、当分雲丹は結構という気分になったことも

事実である。チリ海産物でもう一つ名高いものは、ピコロコと呼ばれる日本でいうフジツボである。いわゆるフジツボといっても、一辺が10cmほどの巨大なもので中に身が一杯詰まっている。不思議なことに貝の仲間ではなく甲殻類のようで、カニの身のような味がするそうである。ピスコサワーやもっと強めの酒の威力を借りれば大概のことは大丈夫かとも思い、それも注文しようとしたが小塚先生に止められた。確かに美味しいが、外国人の場合、2人に1人は「あたる」そうである。小塚先生も、昔サンティアゴの市場で買って来たピコロコを食べて大変な思いをされたとのことである。美味しいもの変わったもののためなら多少の危険は冒してもよいかとも考えたが、2日後のシンポジウムに穴をあけてしまうリスクも考え、断念した。今思い出してもチャレンジしなかったことは残念である。

田島先生は、このキロエ島の南端にあるサロート島にまで調査に行かれた経験があるそうである。何のためにそのようなわけのわからない所まで行かなければならなかったかと問うと、そこに住んでいる純血種のインディオの血液を採取して研究するためらしい。アフリカのルーシーから始まったと言われているホモサピエンスは、氷河期で水

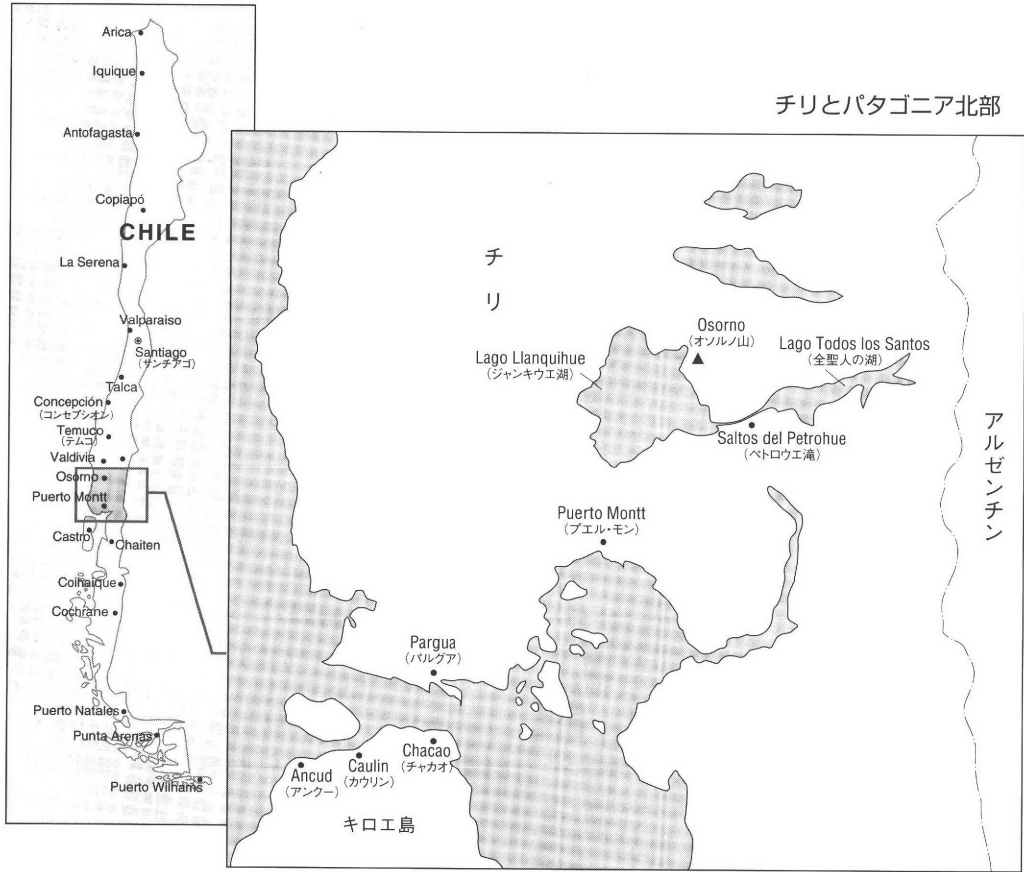
位の下がったベーリング海峡を渡ってアメリカ大陸に入り、どんどん南下してこの南米の南端にあるパタゴニアにまでたどりついたのだと言う。それがどういった疫学研究になるのかを聞いてみたところ、日本の九州地方などに見られる成人型T細胞性白血病（HTLV-1）の遺伝子形質が純血種の南米インディオの遺伝子の一部にも組みこまれていることがあるためだそうである。田島先生によれば、現在でもそのような遺伝形質が多く残っているのは、アンデスの山の中とかチリ北部の砂漠の近くに点在しているごく一部の孤立した部族のなかで、欧米人の侵略をうけたり、交易の拠点になって人々の往来や交流が盛んであった地域の人々ではほとんど失われているとのことであった。田島先生はこのチリでのシンポジウムのあとペルーに移動して、そこで発見されたミイラの骨髄からPCR法を使ってDNAを抽出し、環太平洋地域の人類の移動と、それに伴う疾病の歴史を調査される予定である。私もペルーへの同行を勧められ大きく心が動いたが、どうしても帰国後のスケジュールとの調整ができないため残念ながら断念した。キロエ島から戻ってプエルト・モンに泊した。その夜の食事では、苛酷なスケジュールから生還したことを祝して、またまたピスコサワーの乾杯からコンチャ・イ・トロという著名なチリワインを皆で痛飲した。

次の日は前日とは打ってかわった晴天で、南の端に近い寒いこの地でも春の息吹がかすかに感じられた。矢谷先生がホテル近くでウインドブレイカーを購入されていたのでうかがったところ、やはり昨日、特にむき出しのフェリーの船の上が寒かったからと言われた。前日、苦情も不満も一言も言われず涼しい顔をされていたことを思い出し、自分たちより随分年上である矢谷先生の世代のもつたフな（痩せ）我慢強さと気力、パワーに改めて尊敬の念をいだいた。プエルト・モンから今度は北東に進路をとり、ジャンキウエ（Llanquihue）という湖に至った。ジャンキウエ湖はプエルト・モン周辺の湖水地方のなかでも最大の湖である。

湖のほとりで小休止をとると、在住日本人からはチリ富士と呼ばれているオソルノ（Osorno）山が目前に見えた。富士五湖から見る富士山と似ているが、南半球独特の、青というより紫に近い空と水に映える姿は例えようがない。ジャンキウエ湖からは東に向かってペトロウエ（Petrohue）の滝を目指した。ところが滝の入口に着くと門が閉鎖されていた。どうやら昨日の曇まじりの大雨で何本かの大木が倒れて通れなくなってしまったためらしいとのことであった。諦めて、さらに東に進んで全聖人の湖（Lago Todos los Santos）に着き、小さなクルーザーでさらに湖を東に向かった。行く先には3,000mを超えるアンデスの山々が連なり、雪を頂いた峰々が、人間が触れられない神々の領域を示してそびえ立っていた。山の向こうはもうアルゼンチンだとのことである。渡辺先生はこの光景を見ながら、20数年前にやはり招待されてここまで来たこと、その時と光景が何ひとつ変わっていないことなどを思い出深く話された。私自身も、何年かして今一度ここに戻って来たときにどのような感慨を持つだろうと思うと胸が一杯になるほどの美しい風景であった。

全聖人の湖から戻る途中で昼食をとった。またアペリティフのピスコサワーとチリワインであった。この旅行をしている間、昼食、夕食とも一日中毎日ピスコサワーで乾杯し、ワインを何本も空けていたように記憶している。プエルト・モンに戻る途中でムシエンテス教授が突然「プエルト・モン」という曲を歌いはじめた。チリ人の90%近くは白人系であるが、冷静で実務的な欧米人とは少し違って何か熱い心を感じさせる人々であった。彼らにとっても最果ての地パタゴニアの入り口であるプエルト・モンは、特別なセンチメントとメランコリーの入り混じった思いを呼び起こさせる場所のようである。

夕方遅くの飛行機でプエルト・モンからテムコ（Temco）という街に着陸し、そこで一度休憩した後、コンセプションに着いた。夜食は夜の12時近くになってしまったが、例のごとくピスコサワ



一での乾杯とそれに続く「120 (シエントヴエンティ)」をはじめとするチリワインは、長旅の疲れを癒す素晴らしいものであった。

コンセプションにおける3日間のフルタイムのシンポジウムのおと、矢谷先生と私は直接日本に帰国した。小塚先生はエクアドルでの会合に向けて、また渡辺先生はボリビア、田島先生はペルーでの調査のため、チリを発たれた。

小塚先生を中心とした愛知県内のスペイン語圏愛好家グループは、この旅を契機に「南米悠久の会」を設立し、南米の音楽や風土を愛する人たちが留学生なども含めて集まりをもって、遠かった、また楽しかった旅のことを毎年語り合っている。矢谷先生は三重大学の学長に再選され、また渡辺先生は胃癌学会、大腸癌研究会の会長として日本の病理学の牽引者として活躍されている。田島先

生のHTLV-1の疫学調査は独創的かつきわめて重要な研究として世界中の疫学者に評価され、結果はNature Medicineに発表された。

一緒に旅をしていた自分としては、皆タフで優しくお酒が好きな人たちという感想しか持っていなかったが、今考えてみるとそれぞれの分野において日本を代表して大きな仕事をなさっている先生がたと、短い間ではあったが地球の裏側にある南の果ての地で共通の時間を持つことができ、またいろいろなお話ができたことは通常では考えられない得がたい経験であると思っている。

記憶をたどりながらこの紀行文を書くことによって、同行の先生がたに対する感謝の気持ちを新たにするとともに、当時のいろいろな出来事が、心にしみいる鮮やかな記憶として刻みこまれていることを懐かしく思い出している。